

考古学特殊研究 国分寺瓦の研究（13～15） 国分寺瓦屋と瓦陶兼業窯

（梶原 2005 「国分寺瓦屋と瓦陶兼業窯」『日本考古学』19）

◎西海道・吉備の例：国分寺造営に関する中央の直接的援助が

普遍的であったという定説を否定し、
官営施設造営に対する在地力の大きさを強調。

しかし、それだけでは先学の否定のみの研究に終わる。

瓦を研究材料に選んだ者としては、それに代わる新しい価値観を、つまり

「では瓦から何が言えるのか？」

ということを提唱しなくてはならない。

そのキーワードとなるのが「造瓦組織論」である。

仮説：国分寺創建期において瓦陶兼業体制をとる国においては、
工人系譜の継続性が強いという傾向がみられるのではないか。

◎遠江の例

・遠江国分寺：静岡県磐田市に所在。

調査歴は古く、昭和 26 年、石田茂作氏や斎藤忠氏による調査が最初
昭和 27 年、国分寺としてはじめて特別史跡に指定。

現在、再整備の計画がもちあがる。

尼寺は僧寺の北方の住宅地内。

伽藍配置：中門と金堂を回廊で結び、塔を回廊外の西におく配置→東大寺式

近年、伽藍に先行する掘立柱建物が発掘された：仮の堂宇か？

・遠江国分寺の瓦窯

創建から廃絶まで、一貫して清ヶ谷窯で生産される。

清ヶ谷窯：遠江国分寺より東南東約 15km。

8 地区 36 地点で遺物が採集される。詳細な基数は不明。

国分寺創建期の 8 世紀中葉頃に操業を開始し、瓦と須恵器を焼成。

その後平安期以降は、灰釉陶器・山茶碗の大生産地となり、

12 世紀まで存続する。

清ヶ谷窯内の瓦生産窯

竜天薬師堂窯：瓦専焼。創建～修造期。

猿田彦神社境内窯：瓦陶併焼か。創建～伽藍整備期。

寺ヶ谷瓦窯：瓦専焼。ロストル式平窯。修造期の異系統瓦を焼成。

五郎右衛門窯：瓦陶併焼。創建～修造期。

- ・遠江国分寺の瓦：単弁八弁軒丸瓦と、中心飾りの反転した均整唐草文軒平瓦。
平城宮の影響も指摘されるが、粗雑で在地的な文様。
少数の異系瓦をのぞき、すべての時期の瓦が文様・技法的に連続。

◎佐渡の例

- ・佐渡国分寺：新潟県佐渡市（旧真野町）に所在。
佐渡島の西部、国中平野を望む高台に築かれる。
伽藍配置：中門と金堂を回廊で結び、塔を回廊外の東におく。
金堂北東方に5間×5間の礎石建物
→他とは軸線が異なり、のちの時代の金堂とされる。
→金堂後背地の調査では遺構が検出されず。講堂の可能性も？
- ・佐渡国分寺の瓦窯
創建期には寺院近接の経ヶ峰窯で生産。
9世紀中葉以降、やや離れた小泊窯に生産地が移動。
経ヶ峰窯：佐渡国分寺の創建瓦とみられる瓦を焼成した瓦専業窯。寺院に近接。
小泊窯：9世紀中葉に開窯。須恵器をおもに生産するが、瓦も焼く。
出土瓦は経ヶ峰よりも型式的に後出。
小泊産須恵器は、越後を中心に、青森県まで広く分布する。
→島外輸出を目的とする大生産地。
- ・佐渡国分寺の瓦：軒丸瓦は菊花文系。
軒平瓦は幾何学文系・均整唐草文系・偏行唐草文系の3種あり。
一部を除き、瓦当を三日月状につくる点で、製作技法の共通性。
陸奥南部（福島県）の清水台遺跡（安積郡衙）周辺等に一部類例。
経ヶ峰窯と小泊窯の製品には、文様・技法的な乖離がみられない。
→9世紀中頃、生産地の移動にともない、
経ヶ峰窯から小泊窯へ、瓦工が移動したと考えられる。

◎上野の例

- ・上野の初期寺院：上植木廃寺・山王廃寺・寺井廃寺・金井廃寺など
- ・上野国分寺：中門と金堂を回廊で結び、塔を回廊外の西に置く伽藍配置。
- ・上野国分尼寺：中門・金堂・講堂が直線的に並ぶ伽藍配置。
- ・二寺中間地点：国分二寺の寺院地にとまなう諸遺構・遺物。
- ・上野国分寺の瓦
 - ・在地寺院系瓦
 - ・「上野国分寺創建統一意匠」：B201－P001
 - ・別種の創建瓦：E103－NH301
- ・上野国分寺の瓦供給窯
 - ・笠懸窯跡群：東毛の新田郡。瓦陶兼業窯で、操業開始は国分寺造営が契機。
 - ・吉井・藤岡窯跡群：西毛の多胡郡。前代からの須恵器生産地に作られた瓦陶兼業窯。
 - ・供給窯と出土瓦：創建当初は、「統一意匠」系：笠懸

素弁蓮華一重弧系：吉井・藤岡

創建末期になると、吉井・藤岡において素弁蓮華一重弧系が衰退。

代わって笠懸系の文様が吉井・藤岡でも作られるようになる。

修造期になると、笠懸窯が操業停止。

吉井・藤岡で笠懸系の文様・技法の瓦の生産が続けられる。

◎下野の例

- ・国分寺造営以前の私寺は3郡3ヶ所のみ。出土瓦の様式もまったく異なる。
- ・下野薬師寺：創建は天武朝頃とされる。西の観世音寺と並んで、戒壇が設置。
1塔3金堂の飛鳥寺系の伽藍配置。出土瓦は川原寺式を創建瓦とする。
- ・下野国分寺：中門と金堂を回廊で結び、塔を回廊外の東に置く伽藍配置。
- ・下野国分尼寺：中門・金堂・講堂が直線的に並ぶ伽藍配置。
- ・下野国分寺の瓦
 - ・在地寺院系（郡系）瓦
 - ・下野国分寺主要瓦

・下野国分寺の瓦供給窯

- ・水道山3号窯（戸祭窯跡群）：河内郡に所在する瓦陶兼業窯。

河内・那須・塩屋の北3郡の担当瓦を生産。

- ・荒神平窯跡群・西山窯跡群：それぞれ那須郡・芳賀郡に所在し、同郡担当瓦を生産したとおもわれる。瓦範を共有しており、工人移動を想定。

- ・三轟山窯跡群：安蘇郡に所在する瓦陶兼業窯。都賀・安蘇・足利・梁田・寒川の南5郡担当瓦を生産。

1-2期になると、各窯から工人をあつめ、三轟山のみで生産。

このとき瓦範も移動。

軒丸瓦は接合式に。軒平瓦は飛雲文の採用。

三轟山窯において、全9郡分の箆書文字瓦を確認。

◎東北の城柵官衙

- ・城柵：7世紀中葉以降、律令政府の対東北（蝦夷）政策のもとで造営。

軍事拠点的というより、行政府としての機能が大きい。（建物配置などから）

しかし、軍事的要素も無視はできない。

寺院が近接する例も多い：「郡寺」的役割←異論もある

瓦葺の城柵は以外と多い：

陸奥：多賀城・城生柵・新田柵・桃生城・胆沢城

出羽：秋田城・城輪柵

非瓦葺の代表的城柵：志波城・徳丹城・払田柵

造営時期（9世紀初頭）の問題？性格の違いを反映？

多賀城・陸奥国分寺

- ・多賀城：多賀城市に所在。陸奥国府。724年に完成した、東北政策の最大拠点。

標高50mほどの低丘陵上に位置。方約8町の不整形。

政庁域は4期にわたる建て替えがおこなわれる。

南東方に多賀城廃寺を付設する：大宰府における観世音寺の位置？

近年、多賀城南方の市川橋遺跡の調査で、大路や橋の遺構が発見される。

- ・陸奥国分寺：仙台市に所在。多賀城からはかなり離れた場所。
昭和30年～34年にかけて調査がおこなわれる。
中門と金堂を回廊で結び。塔は金堂の東方に位置。塔院をもつのが特徴。
その東方には尼寺も確認されている。

多賀城・陸奥国分寺の瓦

- ・多賀城の創建（Ⅰ期）瓦：郡山遺跡（初期陸奥国府）の系譜をひく、
単弁八弁軒丸瓦と重弧文軒平瓦のセット。軒丸瓦の滴状蓮子および、
軒平瓦の三角形の顎断面、波状の顎面施文が特徴。
平城宮系の細弁蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦も一部入る。
生産地は宮城県北部の大崎平野周辺に散在。
（木戸・大吉山・日の出山・下伊場野の各窯跡群。いずれも瓦陶兼業窯）

・陸奥国分寺創建期（Ⅱ期）の瓦

陸奥国分寺の創建瓦：軒丸瓦Ⅰ期とおなじ単弁八弁蓮華文だが、
軒平瓦は偏行唐草文をあらたに採用。
多賀城・多賀城廃寺の瓦：軒平瓦はⅠ期とおなじ重弧文系だが、
軒丸瓦は重圏文系瓦をあらたに採用。
双方とも製作技法的特徴は共通。窯場もおなじ台の原・小田原窯跡群。
Ⅱ期瓦のみ、顎面に波状施文をまったくほどこさない特徴。

・奈良末の多賀城修造（Ⅲ期）の瓦

単弁八弁系軒丸瓦と重弧文系軒平瓦のセットが復活。
重弧文だけでなく、波状文があらたにもちいられる。
いちぶに細弁蓮華文と均整唐草文系瓦（台の原→春日大沢窯）
顎面施文は、重弧文系10割、唐草文系7割、波状文系はゼロ。
生産地は引き続き台の原・小田原窯跡群。

・平安期の多賀城修造（Ⅳ期）瓦

単弁八弁軒丸瓦と重弧文系軒平瓦のセットおよび、
統一新羅系の宝相華文軒丸瓦と連珠文軒平瓦。
顎面施文は6～7割程度。

- ・文様系譜および軒平瓦の顎形状・顎面施文は、一部紆余曲折はあるものの、
Ⅳ期まで引き続きもちいられている→工人系譜の連続性。

◎まとめ

- ・瓦陶兼業の操業形態をとる国分寺瓦屋：修造期以降も工人系譜が継続する例多い。
- ・継続の状況
 - ① 同一生産地で継続して操業：遠江・下野・陸奥など
 - ② 瓦専業窯から、より陶器生産に向けた瓦陶兼業窯へ：佐渡
 - ③ 伝統的須恵器生産地への回帰：上野
- ・瓦専業窯における継続性について：西海道諸国の例
 - 筑前・筑後・豊前・肥前・薩摩で国分寺創建期の窯
 - 筑後・肥後・大隅でそれ以降の窯
 - 工人系譜は継続せず、むしろ修造期には大宰府との関係。

◎尾張の例について

- ・尾張地方：猿投窯をはじめとした大規模な須恵器→灰釉陶器の生産地として著名。
- ・国分寺創建以前には、瓦陶兼業体制も：尾北窯内の篠岡2号窯
 - 在地系瓦として国分寺へ？
- ・8世紀中葉以降は、陶器生産に専業化。
- ・尾張国分寺の瓦：
 - 複数系統の在地系瓦と国分寺瓦屋の瓦で構成
 - 在地系瓦：篠岡系単弁・東畑系単弁・若宮窯系大安寺式細弁蓮華&均整唐草
 - 国分寺系：軒丸瓦は花卉の肥大した単弁蓮華文（接合式→一本作りへ）
 - 軒平瓦は中心飾りの反転した均整唐草文と、
 - 統一新羅系の均整内行唐草文の2種。
 - 軒丸と統一新羅系軒平は、東畑廃寺に祖型あり。
 - 窯跡は発見されていないが、既知の窯業地帯での出土はなく、
 - 寺院近接の瓦専業窯での焼成が想定される。
 - 文様系譜など継続せず（とくに軒平の文様系譜）

- ・尾張の瓦生産：

12世紀頃になると、既存の灰釉陶器窯において、瓦が併焼されるようになる。

- ・大府市吉田窯・社山窯
- ・名古屋市東山窯・八事裏山窯
- ・知多古窯跡群 など →京都をはじめ、遠隔地に供給

これらの瓦は、尾張国分寺などそれまでの尾張国内の瓦とは結びつかず、むしろ平安京などに系譜が認められる。

- ・同様の例は、播磨・讃岐など、古代末期に京都へ瓦を搬出する大生産地ではいずれも顕著にみうけられる。

◎地方における瓦陶兼業窯（総括）

- ・兼業的生産の契機はさまざま考えられるが、古代の地方において、**瓦専業での工人の継続的維持は難しかったのではないか。**
- ・その結果、国府系瓦屋においても、**兼業体制をとるものが、継続的工房として残ることが多かったと考えられる。**
- ・その状況は平安後期あたりまで同様であり、瓦工の**完全専業化**は商品経済の発達と、**工人の公権力を離れた独立に伴う過程として成立。**